



fig.1 調査地周辺の航空写真（1：5000 昭和37年撮影）

I 序 章

1 調査の経過と概要

当該地区は通称大宮通りに面する地であり、近隣地区に大型商業施設が進出したこともあり、近年とみに商業地として開発が進んできている。

今回、二条大路南三丁目179-1において、民間会社による開発の申請がなされた。当該地区は平城宮左京三条一坊七坪に当り、平城宮や朱雀大路から至近の地にあり、奈良時代の重要遺構の存在が推定された。そこで、奈良県教育委員会と協議の上、工事に伴う発掘届が提出された。発掘届にもとづき、奈良県・奈良市と奈良国立文化財研究所の間で協議の結果、奈良県教育委員会の依頼により、奈良国立文化財研究所が発掘調査を担当することとなった。

敷地面積3200㎡のうち、調査用プレハブなどの用地を除く2200㎡について、発掘調査を行った。1月7日に関係者立会いのもとに調査地区を設定した。調査地の北端と南端は、トラックの進入路として厚い盛土がなされ、一部にはコンクリート舗装が残っていた。このため、当該部分を除いて調査区を設定した。翌8日から重機によって盛土・旧耕土・床土の除去に取りかかった。1月13日から、作業員による本格的な発掘調査にはいった。実際の調査経過は、tab.1を参照されたい。

調査前の当該地には、大型の鉄骨スレート葺き倉庫が建っていた。その基礎が、調査区中央に5m間隔で15基並ぶ。さらに、倉庫以前に存在した工場の機械設置のために掘削された巨大な土壌で、調査区の西南部約500㎡が攪乱され遺構が残らない。さらに、倉庫の基礎の東側を、コンクリート管による暗渠が南北に貫流する。これ以外にも、至る所に現代の攪乱層が存在し、調査は、まずこれらの攪乱層の始末から始めなければならなかった。幸いなことに、攪乱以外の面では奈良時代の遺構面が残っており、掘立柱建物13棟、井戸5基、大形の土壌2基、道路2条などの遺構を検出した。



fig.2 調査風景 (SK5769の発掘)

1月8日-10日	重機による上土除去
1月13日	調査開始
1月22日	SK5769検出
2月6日	SB5758柱穴検出
2月15日	SB5752検出
2月29日	南端の部分的拡張はじめる SK5769掘り下げ
3月5日	記者発表
3月7日	現地説明会
3月9日	空撮 遺構全景の写真撮影
3月11日	地上写真撮影
3月12日	断割調査開始 井戸掘り下げ
3月25日	攪乱層の埋め戻し開始
3月27日	断割調査・土層図作成完了
3月31日	部分的な埋め戻し完了
4月1日	撤収

tab.1 調査経過

2 周辺の調査

調査地周辺では、レストラン建設や駐車場造成、住宅改築などに伴う発掘調査がおこなわれている (fig.3)。

まず条坊関係では、奈良国立文化財研究所が1978年に行った平城宮第103-15次調査で、七坪と二坪を画する坪境小路西側溝を検出している。調査地の東、市道の東脇で奈良市教育委員会が1983年に行った調査では、七坪の東を画し、平城宮南西東門・壬生門に達する東一坊坊間路の西側溝と、それに伴う築地塀を検出している。七坪の北限については、奈良市教育委員会が1986年に行った第119次調査で、一坪と二坪の坪境小路が検出されており、東へ延ばすと調査対象地の北にある北新大池の堤のやや北に位置する。

七坪のなかでは今回が初めての調査であるが、周辺の坪では、ある程度坪内の状況が明らかになっている。

西隣の二坪では、1988年に奈良市教育委員会による第143次調査が行われ、南北方向の掘立柱列と礎石据付痕跡が検出された。

東隣の十坪では、中央西寄りで、1991年に奈良市教育委員会第219次調査が行われ、掘立柱建物6棟、掘立柱塀1条などが検出された。十坪の南西部では、1992年に平城宮第234-10次調査が行われ、小形の井戸1基が検出された。坪中央であるにもかかわらず、建物の規模は比較的小形である。ところがその隣の十五坪では、駐車場造成に伴う比較的大規模な調査が1992年平城宮第230次調査として行われ、坪中央に五間四面の主殿、南に桁行七間、梁間二間の前殿、左右に桁行九間、梁間二間の脇殿をようする、大形掘立柱建物群（のち礎石建物に建て替え）の存在が明らかとなった。さらに北側の坪境小路想定地付近に築地塀があり、十五・十六坪が一体となった二町占地の土地利用がうかがわれる。

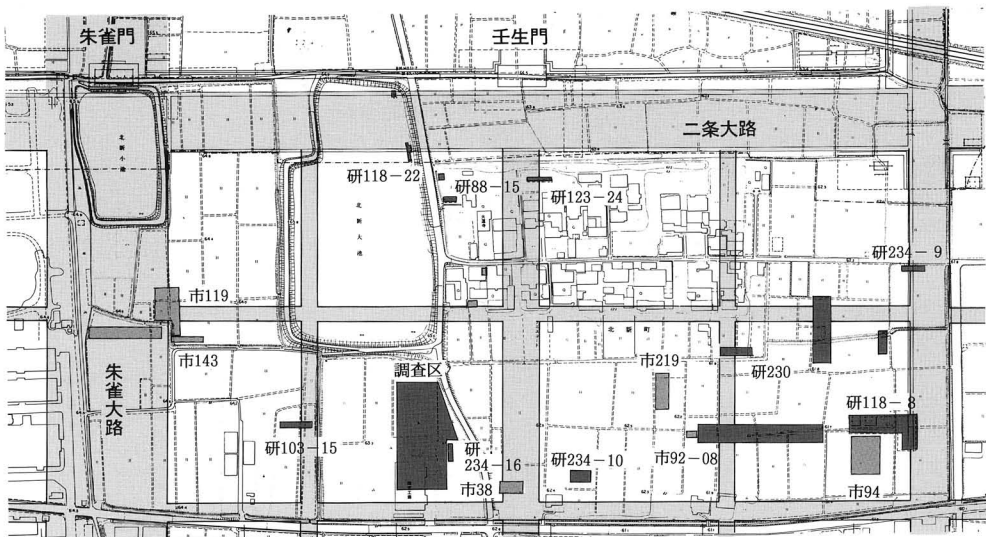


fig.3 周辺の調査 (■ 奈文研 ■ 奈良市、研および市+次数で表示)

0 100 200m